
ヤンデレパートナー。

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレパートナー。

【Nコード】

N70020

【作者名】

キラワケ

【あらすじ】

「付き合ってください！」と顔を真っ赤にして告白してきたのは、迷う余地なき美少女でした。長い黒髪しなやかでちょっと小柄で可愛らしいそんな彼女が告白してきた事実、何故に自分なんかと？かなり困惑しました。なりゆきで付き合い始めてみると、なんというか周囲の視線が変なんです。友人に尋ねてみると震える声で言いました「コウタ……そいつぁヤバイ」と言うと友人の広野君は倒れてしまいました。更に尋ねると「彼女は危険だ」と言い残すと、何かに追われるように逃げ出すと離れた場所から断末魔が聞こえま

した。次々と倒され・消されていく友人に恐怖を覚えていると「…
… 邪魔者は除けましたからっ」と、なんとも可愛らしい笑顔で恐ろ
しいことを言う、僕に告白してきて付き合いはじめた彼女がそこに
は居たのです。

エピソード1 ランチタイム

昼食の出来事。

教室で一つの机を二つの椅子を使って、僕とアキさんは昼食を食べていた。

「はい、あーん」
「あーん」

こうしてアキさんは僕におかずを箸で口へと運んでくれる。恋人
どうしの「あーん」というものだ。

少し恥ずかしい気もするけど……ぱくりもぐもぐ……美味しい、
うん。

「はい、あーん」
「あ、あーん」

本当にアキさんの手料理は美味しいなあ。
ぱくりもぐもぐ……しっかし頻度が高

「はい、あーん」
「あ」

でも、少しスピードがはやいかな？
ぱくもぐ……殆ど租借できてないや。

「はい、あーん」
「ちよっと待ってアキさん」
「！」

「少しゆっくり食べられると」

そう言った途端にアキさんは悲しそうな表情へと、先程までの嬉しさに満ちていた顔を変えて、

「そうですか……私の料理は食べられないほどに」

「いやいや、それは思い切り誤解だよ！ 美味しいって！」

本当にそれは誤解だった。美味しいことこの上ない、食は進むけれども、少しペースを考えてほしいと思うだけで

「……すみませんコウタさん。気を使わなくていいんですよ……」
「気を使つてなんか！」

「いいんです！ こんなマズイ料理を作る私なんて、喉に箸を貫通させてしまえばいいんです！」

「エグイって！ そんなことやめてよアキさん！」

それは確実に死んじゃうから！

「……そうですか、見た目がエグくなればいいのですね」

「いや、そういうことじゃなくてさ」

「今から箸を鼻から」

「結局エグいじゃないか！」

どう足掻いてもエグイ！

「ど、どうしましょう！」

「しなくていいから！ アキさんの料理はとっても凄く素晴らしく大変美味なだけで、ちょっとペースが早かったただけなんだよ！」

早口ながらも説明する、なぜなら……アキさんが今にも箸を喉に入れ始めていたから。

「……そうなのですか？」

「うんうん、とつても美味しかったよ」

笑顔をつくって答える。するとアキさんも箸を下ろして、安堵の表情へ変わる。

「……私はなんて勘違いを」

「そうだよ。アキさんの手作りのお弁当は本当に美味しいよ、いつもありがとう」

お礼を言うタイミングがなかなかなくて、遅かったと思うけど。言えてよかった。

そう感謝していた直後に、アキさんはまた表情を変えて、どこか失望したような無表情に。

「私に……私にコウタさんの食べるペースが分からないなんて」

「し、仕方ないって」

自分のペースって、人それぞれだもんね。

「仕方なくありません！ これでは彼女さん失格です！ 私はこのまま背中を強く打って脊髄を損傷してしまえばいいんです！」

「その後がエグいよ！ やだよ……アキさんが寝た切りなんて」

そのエグイ自分の罰し方に、悲しくなった。その後を想像すると、とてもとても

「コウタさん……手間が増えてしまいますものね。私なんて介護していたら大変でしょう。そして、きっと私は捨てられるのでしょ
うね」

「そんなことないよ！ 例えアキさんが寝た切りでも、一生付き添
って生きて行くよ！」

僕はアキさんが心のそこから好きで、アキさんがどんなに変わっ
ても僕は好きで居続けるつもりだった。

「……！ 今から寝た切りになります」

「いやいやいや！ 望んでない望んでない！ 僕は出来るならばも
っとデートとか」

「……！ もう少し生きてみます」

「うん。もう少ししてのが気になるけど……良かった」

「では、お弁当の続きを」

キーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴った。ああ、惜しい事
したなあ。アキさんの料理とっても美味しかったのに……

「……チャイムを鳴らしたのはどのどいつですか」

「いやアキさん？ そんな物騒な錠なんか構えて何を、というか何
処から」

「二人の時間を邪魔しないでくださああああい！」

「いや！ チャイムに罪はないから！ 待ってアキさん………という
か振りまわしながらいかないでください！」

ああ、生徒が……生徒が錠に当たって吹き飛ばされてる！？ あ

あ！ 広野君、相澤君大丈夫

* *

ええと、ということでは先程のアキさんが僕の彼女です。それで僕はアキさんの彼氏です……えへへ。

ちょっと噛みあわなかったり、勘違いで暴走したりするけど……それも僕のことを思っていることなんです。

アキさんはとても可愛らしいんですが 俗に言う”ヤンデレ”というものみたくて、本当のことを言うとき少し苦労してます。

それでも、彼女の傍に僕は居たいと思っています。それほどに僕は彼女、アキさんが大好きなんです。

そして、これから話すことはそんな僕とアキさんの日常です。

エピソード2 席替え

それはロングホームルームのある日のことです。

月に一回はクラスでの長い自由時間であるロングホームルームを利用して席替えを行っています。

アキさんと付き合い始めたのが四月の終わりの四月二十九日で、五月にさしかかる前日である四月三十日金曜のロングホームルームに席替えが行われることになりました。

「（少し恥ずかしいけど、アキさんの近くの席だといいな）」

そんな希望を胸に、僕は当日の席替えの時を迎えるのですが。

「（ああ……やっぱり）」

くじ引き。至極、厳正な決め方です。

「（でも僕はくじ運がないからなあ）」

商店街での福引では残念賞であるティッシュより一歩手前の醤油の小瓶だけが何度も当たったし、遠足のバス席では毎回酔いやすい後部座席。

懸賞が当たったことは一度もなく、友人が少ないというのに今までの席替えでは遙か彼方へ飛ばされ、それも廊下に面した場所の柱部分。

あまりくじ引きでいいものを引き当てた記憶はなかったりする。

「（というかアキさんと付き合えたことで、もう一生分の運を使い果たしたんじゃない）」

そう思ってたぐじ引きを行う為に席を立って、教卓の前へとやってきます。

「あ、ちょっと待て」

これを引けば、と言おうとしたところで強面の担任教師に呼び止められて手をその空中で硬直させてしまいます。

担任教師は袋の中身をじっと確認します、あまりシャッフルがされていなかったのでしょうか？

それでも、何故か担任教師の表情は強面とはまた違って強張っているようにも思えます。

「……先生？」

「だ、大丈夫だ！ よし上野引け」

「あ、はい」

言い忘れていましたが僕は上野コウタです。
背は平均的で、細っこく影が薄めで特徴の無く冴えないのが僕です。

「き」

「九番だな、よし」

僕の引いた紙を速攻見たのか、すぐに席をあらわす表の書かれた黒板に名前が書かれていきます。

ちなみにこのクラスは三十六名で、六×六の席配置になっていて、僕は前から三番目窓側から二番目の位置。

黒板も見やすいし、悪くない席だと思う。

「じ、じゃあ姫城」

ちなみに……え、えと僕の彼女は姫城アキさんと言います。

長い黒髪しなやかで少しつり上がった黒い瞳とちよつと小柄で可愛らしいそんな彼女さんです。

「はい」

一番前の席という、教師に近ければ指名率もおのずと高くなるこの位置はあまり好きではありません。そんな席に戻って、見えるアキさんの姿を横から見ます。

「（本当に彼女が僕の彼女さんなんて信じられないや）」

やはり彼女は少し小柄ではあるのですが、かなりの美人さんなのでした。

昨日の今日のことです。浮かれ過ぎかもしれないし、もしかしたらお遊びでした。なんて発想が浮かんでくる辺り、僕は相当なネクラです。

そう悪い方へ悪い方へと発想が行き始めたその頃でした。

「コウタさんっ、お隣ですよ！」

「え、そうなの」

内心かなりに喜んでいますが、恥ずかしいですからつい抑えこんでしまいます。

しかしその間にも彼女は気付かぬ内に沈んでいった

「……私が隣じゃダメだったのでしょうか」

それに少し涙目です。え、なんでという感想の前に、ちゃんと僕の意見を

「嬉しかったですよ！ ぼ、僕もアキさんの隣に座れて嬉しいです」
「よ、よかったあ……」

安堵するアキさんも可愛らしく、見惚れてしまいます。このまま毎日彼女を近くで見たいと考えると、嬉しさがこみあげてきて仕方がありません。

「……………」

ただふと顔を上げた先に見えた担任教師が少し青ざめていたのは何故なのでしょう？

こうしてアキさんは僕の右隣の席になりました。

* * *

六月の初めです。

ロングホームルームの金曜に合わせて、また席替えの時です。

「（あー……もしかしてこれでアキさんが隣にいる生活も終わりがなあ）」

そう思うと今行われるであろうこの席替えが、少し残念です。しかし、奇跡は起きるもので

「コウタさん、また一緒に席ですね！」

「本当だ！　すごい偶然だね！」

位置こそ、前から四番目廊下側から三番目へと変わりましたが右隣にはアキさんがいます。

「嬉しいです。これからも……よ、よろしくお願いします」

「こちらこそです」

こうしてまたアキさんが右隣にいる学校生活が再スタートしました。

少し気になっただけなのですが、担任教師が青ざめていました……温度変化が激しいですから風邪でしょうか？

*
*

七月の初めです

またこの時が来てしまいました。

「（今度こそ終わりだよね）」

三度も、こんなに幸せな事は続きません。そう分かってはいるのですが、

「（せめて近く席でありますように）」

と願ってしまいます。しかしその願いは裏切られました　いい意味で。

「コウタさん、一緒です！」

「びっくりした！ 本当に一緒だね」

「はい……運命を感じます」

「う、うん」

運命なのかもしれない、普段ネクラな僕がそう思ってしまう程のラッキーでした。

こんなことがあっていいのだろうか、何か悪いことの前兆なのだろうか そう思う事さえ忘れて喜んでしまいました。

ああ、夏休みまで短いけれどずっとアキさんと一緒なんだ……と
考えて胸が熱くなります。

「これからもよろしくね、アキさんっ」

「はい！ コウタさん！」

ちなみにこの日は担任教師は休みでした、前日から体調が悪そうでしたね。

そういえば今代理で来ている副担任もどこか、調子が悪そうですね……顔も青ざめていますし。

エピソード3 登校風景

朝……

僕は朝日で目を覚ますと直後に目覚ましがジリリと鳴った。

「少し得した気分」

目覚ましよりも早起きな僕は布団から這い出ると、居間に向かった。

歯を磨いて、顔を水で洗って、朝食を摂って、学生服に着替えて。

「行つてきまーす」

僕は後ろ手に玄関の扉を閉じると、家を出る。すると門の前に見慣れた顔が見えた。

「ユイ、おはよ」

短髪に栗色の髪を切りそろえ、僕と同じ背丈ぐらいで、垣間見える白い歯をキラリ輝かせて太陽のような笑みを向けながら、あいさつ。

「おはよっー、コウちゃん！」

彼女ことユイは、僕の幼馴染だ。

「コウちゃんにまさか彼女なんてねー」
「僕自身も驚きだよー」

ユイは登下校を共にするぐらいに仲が良く、それが十年近く続いてきた。

ユイと知り合ったのは小学校の入学式の時で、それから家も近くですつと親子共に仲がいい。

そして僕には彼女が出来た。小柄で綺麗な黒髪で……そう、突然に僕に告白してきたのだった。

「突然だったもん、ビックリしちゃったよ」

「本当突然だったよね、いきなりコウちゃんが『僕、彼女が出来たんだ』って言うて来てさ……何かの前触れなんじゃないかと思っちゃった」

「何も起らないってば」

失礼だなあ。僕は何気なく、あることを聞いてみた。

「そつえば、ユイには好きな人とかいるの？」

「純粋な興味だった。どちらかというスポーツ系なユイはどんな人が好きなのかなあ、と。」

野球部の前田君とかサッカー部の岡部君みたいな人かな？

「うーん、いるよ？ でもコウちゃんには教えない」

「勿体ぶるなあー、僕に教えないってことは僕に関係のある人かな？」

すると、友人の広野君だったり？ まさか、それは驚きだなあ。

「うん、すつごい関係あるかな？」

隣のユイが見せた意地悪そうな笑顔の中に、僅かに悲しさがあったのを、長い付き合いの僕は見逃さなかった。

……聞いちゃいけなかったんだ。ごめんね、ユイ。謝られるのが嫌いなユイには口に出さず、心の中で合謝罪した。

「もうすぐだよ」

「あ」

そう話している内に学校へと着く頃だった。するとユイは、

「あ、じゃあ先にいくね」

「うん、またね」

ユイは直前まできて、校門が見えるところまで来るとそう言うって先に駆けて行っていた。

「（気を使ってくれるん……だよね）」

校門前には、小柄な彼女が待っていてくれる。

「おはよう、アキさん」

「あ……おはようございます、コウタさん」

これが僕の登校風景。でも……気のせいかな。アキさんの表情が強張っている気がしたのは……？

昇降口まで行くまでの道のりで、彼女は話しかけてくる。

「コウタさん」

「なに？」

「コウタさんは美桜さんと仲がよいのですね」

美桜、ちなみにユイの名字がその”美桜”で。美桜ユイ。

「うん、幼馴染なんだ」

「そう……なのですか？」

「言っただけだったかも、ゴメンね。ユイは」

「いえ、それはいいですけど……そうですか」

隣に見る彼女の瞳何か暗い何かを見たのは気のせいであってほしかった、だから僕は無理に苦笑をする。

そういえば……僕のちょっと前までのことについて話してみようかな？

幼馴染のユイとの日常と、アキさんと付き合うことになった経緯まで

エピソード・2 僕の日常

僕は篠井幸太。今年、高校一年生を迎えました。

運動も勉強も中途半端。成績は中の中から中の上を彷徨っている。背丈は一メートルと六十センチほどで、体重は四十キロ。髪は前髪がいつも額にかかってしまうぐらいには伸びているのが常。

趣味は風景画を描くこと。まあ、でも人に見せられないものじゃないんだけどね。

人物画は……書くと「生気がない」と言われる、少しこのジャンルは苦手なのかもしれない。

それでも僕は日曜になると、風景画を描くために外に繰り出したりする。僕は絵が描くことが好きだった。

家族構成は両親二人に僕一人の三人家族。いわゆる一人っ子と呼ばれるものなのかな？

特に過不足なく、富裕でも貧乏でもなく。至って普通の家庭ではあると思う。

平日の朝、学校に行く支度を済ませて玄関に来ると、

「気を付けるのよー、コウちゃん」

「もー、だから高校生だからその呼び方は止めてって……行ってきまーす」

母さんは、未だに僕へそんな呼び方をするのだった。いい加減にして欲しいのだけど、治る気配がない。

家を出ると、いつも見慣れた顔が待っている。

「おはよー、ユイ」

「おはー！ コウちゃん」

……こっちも同じで呼び方は治らないのだけど、もうあだ名みたいなので諦めた。

「ねーねー聞いて聞いて！」

「なに？」

「昨日の体育の授業でね、野球があつて」

美桜結衣。彼女は僕の幼馴染で……これはもう話したかな？

そう紹介らしきことを内々でしていると、ふいに後ろから視線を感じた。

「？」

「それでねー、で　ってどしたの？」

「いや……多分僕の気のせいだと、思う。ごめんね、続けて」

「うん、そう？　じゃあね、だから」

僕は実を言うと、これが”気のせいではないことを知っている。振り向いた直後に電柱へと、何かから隠れるように黒髪が逃げて行くのを見た。

一度だけなら、きっと見間違えで良いのだと思う。でも、でもだ。

もう、中学を卒業してから。高校に入ってからほぼ毎日、そんな気配を感じてしまうのだ。こんな登校だけではなく、学校内でも。

確かにその黒髪は最初こそ見えなかつたけども、慣れ始めて振り向くのに躊躇がなくなると……ほんのさ先だけだとしても、僕には見えてしまうのだ。

「（……一体なんなのかな？）」

僕は少なくとも何にも目立ったことはしないから、恨みを買われることなんてないと思ってるんだけどなあ。

その気配の主のことで分かるのは、それは長い黒髪で小柄だというだけであった。

「なーなー、コウタコウタ」

「見たかコータ？ あの”奇想天外アメアラレ”」

「見たよー、昨日の良かったよね」

僕には友人がいる。特に話す機会の多いのが広野君と佐藤君だ。コウタと何故か”ウ”を強調するのが広野君で、コータと伸ばすのが佐藤君。

バラエティ番組とかからネットで拾ってきたニュースなども話題にあげては会話を繰り広げる。

「どもー、きちやいまいた！ コウちゃんと周りの男子共っ」

「ひでーな、広野って名字があるのに」

「……そこは名前を主張すべきじゃないかな」

と僕はツツコミを入れておく。

「何の話してたの？ あ、もしかして”奇想天外」

「おー、美桜も見たのかー。どうだったよ？」

「えーとね」

ユイはこうして、二つ別クラスを挟んだクラスからわざわざやってくるのがいつものことで。

中学の時もそうだったし、同じのクラスの際は話題を求めて駆けしてきたし。

一回「もしかしてユイって友達いないの？」と聞いてみたのだけど。

「そうなんだよ……って失礼すぎるよね？ 私には友達の百人や一億人いるよ！」と単位が凄まじいことになっていただけ、いることにはいるらしい。

というか僕が何度か体育の授業でユイが他の女子や男子と話しているのを目撃しているのでそれはないだろう。

「それでも、なんで？」と聞くと「な、なんとなくだよ！ いいじゃん、なんだかんだで話し易いのはコウちゃんなんだから」と怒られ軽く頭にチョップを入れてきた。

いや……軽いつもりなのかもしれないけど、結構痛いからね？

「？」

「どしたー、コーター？」

「なんでもないよ佐藤君。というか伸ばすとモーターみたいになっちゃうね……」

これもある気配だった。でも教室の中では、僕には検討も付かなかった。

でも確かに授業中も感じることもあるから、恐らく同じクラスの人なのかなとは思っただけど。

……相談？ するわけないよ、だって僕は対して迷惑してないしね。あとはネタにされそうだからちょっと……ね？

授業が終わって、僕は机に突っ伏していた。同じ教科の授業が二連続も続くなんで、色々とマンネリすぎる。

更には昼休み一步手前だけあって、精神的な疲れがどっと押し寄せてきた。そうウダっていると、目の前の机前を通り過ぎる際に、女子生徒が生徒手帳を落としたのが見えた。

「あの一、落としましたよー」

落とし主の女子生徒を呼びとめると、彼女は振り返った。

「！」

彼女は小柄だった、僕よりも二十センチほど小さいだろうか？

長いストレートで前髪を横に切りそろえ、黒髪は腰ほどまでであるというのに手入れが行き届いているようで、艶やかさに満ちていた。制服を替えさえすれば、自己申告をしなければ中学生に見えなくもない、そんな彼女は。

美少女と言つ言葉が似合っていた。

なぜ、こんな可愛い子がこの学校にいたことに気付かなかったんだろうと、思うほどに。

きつと笑顔が似合うんだろうな、などということを数秒で思いめぐらせているのを一旦止めにして。

「御親切に」

「いえいえ、はいどうぞ」

「ありがとうございます 篠井コウタさん」

「うん、って……僕の名前」

そう言う頃には彼女は去って行った。

「誰だったのかな……」

この頃に、彼女のことは気になりだしていた。

そして”あの”気配がなくなっていることに僕は気付くことは無かった。

エピソード・1 涙と笑顔と

さつき生徒手帳を拾った女性が気になって仕方なかった。

なんとというか……一目ぼれというヤツなのかな？ あの休み時間以降、彼女のが気になって仕方なかった。
心なしか胸の鼓動も早く思える。

「（なんなんだろう……この気持ち）」

とりあえず名前も知らないなんて、色々と失礼なんじゃないかと思ってしまった。少なくとも彼女は僕の名前を、それも何故かはわからないけれどフルネームで知っている。

調べる術が直接聞く以外にない今、授業中にさりげなく振り向いて彼女を探した。

「！」

僕が彼女を見つけると、彼女もこちらに向いて笑顔で小さく手を振った。

すぐに向き直って、

「（か、かわいい……）」

彼女の笑顔は思った以上の衝撃だった。なんというのだろう、華やかというわけではないけれど、優しい……温かな笑顔だった。

その笑顔を反芻している内に、授業はあっという間に終わってしまっていた。

休み時間。

確か授業の始まりの時に校庭を見たらユイが走っていたので、おそらく体育授業明け。着替えや次の授業の準備でこのクラスに足を伸ばす時間はないと思う。

「あのさ、広野君」

「どしたコウタ？」

「あのね、ちよつと気になることがあって」

「なんだよ？ 気になるってあれか、もしかして女か？」

「えっ」

「ば、バレるのはやいよ！？」

「う、うん……」

「おー、コウタにも青春のページか……俺は何ページもめくって
るはずなのにな、未だにウウツ」

広野君は見かけはいいのにね、何故か女の子と付き合っても直ぐ
に別れてしまうのだった。

「そ、それでね……えーっと見える？ 髪の毛長い黒髪の子なんだけ
ど」

僕がチラリと目配せするように、休み時間でも一人座る彼女を指
すと。

何の前触れもなく広野君の顔がみるみる青ざめていった。まるで
何もなく健康だったのに、突然「手の施しようがありません」と医
者に言われた時のよう。そんな経験僕も彼らにもないけどね。

「ああ……長野か、うん……イインジヤナイカナ」

広野君は突然カタコトになって言った。でも僕にはそれは些細なことではないので……長野、さんかあ。

「そうなんだ！」

「あ、でもコウタ……ッ！？」

広野君は僕が背にしている長野さんの方を見て、顔をひきつけらせて。

「どうしたの？」

僕もつられて振り返ると、そこには笑顔の長野さんがいた。

「あ……やっぱり長野さんは可愛いなあ」

「確かに可愛い……可愛いが………アアシヌ」

突然広野君が白眼をむきだしたけど、些細なことではないので

……長野さんかあ。

そうして後に「長野^{ナガノ} 秋^{アキ}」という舐めであることを教えてもらった。

その時の広野君は、青ざめて膝をがっくりと落として様子が少し変だったけれど、些細なことではなかった。

* *

「し、しのいくんっ！」

突然休み時間を迎えた教室で、授業終わりで次の教科の準備をしているとそんな慌てたような焦って噛み噛みになってしまったかのような可愛い声が近くから降ってきた。

見上げると、僕が気になって仕方なかった 長野アキさんだった。

「え、僕？」

「そう……です。あ、あの……ちょっと来てくれませんか？」

「え、うん。いいけど」

なんだろ……僕は彼女のことを気になっていたけど、彼女は僕に何のようなのかな？

そうして長野さんに弱弱しく制服の袖を引っ張られながら教室を出た。

そこは、体育館裏だった。

少し先を歩く長野さんは何故か、耳まで真っ赤になっていた。

「えーと……長野さん？」

「私の名前……覚えてくれたんですね」

嬉しそうに、そして少し涙ぐみながらそう言った。

「ど、どうしたの長野さん！」

「じめんなさい、嬉しくて……」

涙を拭いながら笑顔を見せる彼女は……あまりにも魅力的だった。

「それで……長野さん？」

「私は……篠井コウタさんにお話したいことがあるんです」

押し迫った、緊張した物言いだった。さっきの呼びだした頃の彼女とはまったく違う。噛みもせず、しっかりとした口調で、真剣な眼差しで。

「……………はい」

僕はそんな彼女に気圧されて、そんなことしか言えなかった。彼女は深呼吸をして、落ちつけて、目を開いて、僕を一直線に見つめて。

「私は……長野秋は……篠井幸太さんが……好きですっ！」

それは告白だった。

気になっている彼女からの、勇気を振り絞つての告白。

顔を真っ赤にして、その答えに怯え震える彼女を待つのは……………ひどく辛いことだった。

だから、僕は

「はい」

そう、答えた。もっと言葉を選んで、並べられれば良かったのに。でも彼女は、彼女はボロボロと涙を流しながら”笑顔”でこう言

うのだ。

「ありがとうございます。……ごぞいます。これから私を……よろしくお願ひ……
……します」

涙に濡れる笑顔は今までに見たどんな笑顔よりも。綺麗だった。
可愛かった。美しかった。

そう、僕はこんな僕には。長野秋さんという、僕には勿体ないほどに可愛らしい彼女が出来たのである。

エピソード 0 始まり

その後、体育館裏に僕たちは未だにいた。
長野さんが泣きやんで、落ちついたところで長野さんは口を開いた。

「あ、あの……篠井コウタさん」
「あ、コウタでいいよ？」

篠井とはあまり呼ばれないからなあ、出来れば名前の方が呼び慣れているというか。

あと、せっかく……付き合ってるのに他人行儀だしね。

「え、じゃあ……コウタ、さん」
「うん、よろしくね。長野さん」

僕の名前を呼んでくれた後、長野さんは直ぐに。

「……あの、私も名前で呼んでもらえると」

長野秋さん。聞いたその通りなら、そのはず。

「アキ……さんだよな？ 間違ってたらごめんね……って長野さん、どうしたの!？」

「私の名前……知ってくれていたんですね」

長野さんは途端に涙を浮かべてしまっ、泣き易い子なんだね……
その泣き顔も可愛い。

って思うのはダメだと思うけど。

「じゃあ、アキさんでいいかな？」

「はい！ コウタさん……それで良かったらメールアドレスを交換してもらえませんか？」

「うん、もちろん。えーとね」

そうしてアキさんとメールアドレスと電話番号を交換した。

アキさんは交換し終わった自分の携帯を、それはやんわりとした笑顔でまるで宝物の

ように両手で包みこんで胸の前に置いていた。

その仕草仕草一つが可愛らしく思えた。

「宜しくお願いします、コウタさんっ」

* *

「おっはよー、コウちゃん」

「おはよ、ユイ」

いつも通りの登校だった。だったのだけど……僕に彼女が出来たのは話すべきなのだろうけど、なんとなく恥ずかしかった。

広野君や佐藤君と違って、あまりにも長い付き合いなばかりに少し迷ってしまう。歓迎してくれると……嬉しいのだけど。

「あのさ、ユイ」

「なに？」

……ちょっとまって、やっぱり言葉は選びたいかな。

「ううん、ごめん。なんでもない」

「そう?」

近いうちに絶対に言おう、うん。これは絶対に　そう思っていたんだ。

学校に着いてみると、校門前に彼女が居た。

「あ、おはようアキさん」

「おはようございます……」コウタさん

僕は校門で……待ってくれたのかな?　そう挨拶をした。

「(隣の女性は一体どちら様なんでしょうか?)(ごめんなさい、勝手にお待ちして)」

「いや僕こそごめんね、待っていてくれてありがとうね」

「(結構に親しいようなのですが)(はい)」

微かにボソボソとアキさんが瞳を暗くして喋っていた気がするけど、気にすることじゃないよね。

すると僕とアキさんを交互に見ていたユイが口を開いた。

「……」コウちゃん?　この女性は誰なのかな?」

「あ、うん。言ってなかったね」

言おうとしたところで、

「あ、あの。私はコウタさんの……彼女ですっ」

先を越されてしまった。

自分で言わなきゃいけないんだけど……情けないなあ、僕。じゃあユイの反応はどうだろ？

「え……」

ユイの表情はどこか変だった。驚くにしては驚きすぎている、まるで有り得ないことを聞いたかのような。

「え、コウちゃん？ それ、本当なの？」

「うん、アキさんは僕の彼女だよ……って言っても昨日付き合い始めたばかりなんだけど」

そう聞き終わる前にユイは、

「そ、そうなんだ。おめでと、コウちゃんっ」

そうしてユイは言い残すと先に昇降口に行ってしまった。彼女がどんな顔をしているのかわかることも出来ないほどに、急に。

この出来事を最後に、ユイはいつも休み時間には来ていた僕らの教室に来なくなった。

* *

「は」

僕は次の日、広野君に話した。僕に彼女が出来たこと、同じクラスの長野秋さんであること。

すると広野君はまたしても表情が強張った。

「コウタ……そいつあヤバい　ぬっ!？」

そう僕に何か言いかけた途端に寝てしまった。広野君のことだから女の子とのデートコースを考えたりとかしたんだろっちなあ、もしかしたらそれで寝不足かな？　寝不足なら仕方ないよね。

きつと広野君は「そいつあヤバい、ぐらいの可愛さ」と言っていたのだから、流石女の子を見る目だけはあるよね広野君！

佐藤君にも話してみたところ、血の気が引いて。

「彼女は危険だ　っ!」

何かに追われるように逃げ出すと離れた場所から断末魔が聞こえた。声を上げたからもしかしてお腹の調子が悪かったのかな？　結構佐藤君は辛いもの好きだから、仕方ないよね。

きつと佐藤君は「彼女は危険だ……なぜなら、競争率が激しすぎるからな」なるほどー、あんなに可愛い子がモテないわけないもんね!　……でも、なんでアキさんは僕はなんだろうっ？

「コウタさん」

僕の名前が呼ばれたので振りかえると、そこにはアキさんがいた。

「……邪魔者は除けましたからっ」

笑顔で彼女はそう言った。

「(言ってる意味は分からないけど、可愛い笑顔だなあ)」

ってないからないから！

そこまで僕は阿呆じゃない、ここまで友人が続いて倒れるなんてそれもアキさんのことを話題に出した時に丁度。

そういえば、昨日も些細とは言ってたけど広野君の様子も変わったし。

「（もしかして）」

もしかして彼女は

「これからはずっと一緒ですよ、アキさんっ」

「はいっ」

独占欲が強い女の子なのかな？　なんか……アキさんがそうだと
思うと可愛いなあ。

可愛いのは否定しないけど、何か違う！

朝もユイと話している間とか、あまり機嫌が良いようには見えなかったし、それにそういえば教室で感じる視線もアキさんと付き合
いだしてから変わった気がする。

というかもしかしてあの視線って……アキさんだったの？

「（これは……）」

確か聞いたことある。これは　ヤンデレってヤツかな？

好きな人に基本はデレデレで、好きな人を脅かすような他の要素
について牙を剥いたり、好きな人をそのことについて問い詰めたり。

「（あ、でも問い詰められたりしてないから違うね）」

なーんだ、やっぱり可愛い彼女じゃないか。色々考えて損したなあ。

*
*

……まあ、本当は色々分かってるんだけどね。ちょっと逃避してみ
たかっただけ。

彼女が僕を好きな気持ちは十二分に伝わってくるので、広野君と
佐藤君には悪いけど ヤンデレであるうと気にしません！

そうして僕とアキさんのちょっと不思議な学園ライフが始まった
のでした。

「あの、コウタさん。お弁当一緒にしませんか？」

エピソード4 彼女と幼馴染

現在午前八時、学校の校門前です。

私は門の柱に少し体を預けながら、あるお方の登校を待っているのです。

その方のお名前は、篠井コウタさん。

実は……私はその方の彼女であつたりします。きゃあ！

今待つその時の私の心臓はどきどきどきどきと高鳴っています、一日初めの生コウタさん。はやく見たいです！

ああ、あの少し自信なさげな表情も時折見せる苦笑の表情まで私はぜんぶ愛しているのです！

一刻も早くお会いしたいです。私を見つけて、私にお声をかけてください。待ち度しいです、この時が切ないです。

「っ！」

そう思っているとコウタさん！ ……と、並んで女生徒がもう一人。で、その方はどうやらコウタさんと仲が良いようなのですよね。確か、違う教室だというのにわざわざ休み時間に訪れては愛しのコウタさんとお話を……！

羨ましかったです、妬ましかったです。その圧倒的に彼との短い距離が。友人なのでしょうが？

……っ！ もしかすると、あのコウタさんが二股を！？ いえ、ありえませんが。いえありえてなるものですか！

でも、二人を養うコウタさんとも考えられる訳で……頼もしいのですね、とも思ってしまう

「おはよう、アキさん」

「あ……おはようございます、コウタさん」

気付けば愛しいコウタさんだけで、もう一人の女生徒はいなくなっていました。私が考え事をしている間にだったようです。

私は……勇気が無くて、だから”見る”ことで”聞く”ことでコウタさんを知ってきました。

ですが、それは一方的で。聞くことも周囲の噂も会話も聞きとつてコウタさんのことを知っていただけですから。

勇気を出すのです、私。一言聞けば良いことなのです！ ただその一言で気になっていることが分かるんですから！

「コウタさん」

聞きます、聞きます。さあ言葉を選んで、自然に……そうナチュラルにするんです。

「なに？」

「コウタさんは美桜さんと仲がよいのですね」

一応名簿で名字だけは知っていました「美桜」という方を。
どのような関係なのでしょう？ 元彼女、それとも許嫁……！
？

「うん、幼馴染なんだ」

お、幼馴染！？

「そう……なのですか？」

そう心配してくれるのは友人のマイとヨリ。

朝コンビニで買ってきたらしいグレープソーダのロング缶をマイは持って、ヨリはドクターペップを持っている。

私はスポーツドリンク、こうして三人飲み物を持って集う事が何故か多かった。

「うっん、なんでもないだ……ゴメン」

なんでもなくない。本当はそんなわけない。

だってだって、

「そういえばさっ、ユイの幼馴染君はどうしたの？ 最近教室にも行かなくなっただけどっ」

う、痛いところをついてくるなあマイは。

「……マイ、ユイの幼馴染は彼女が出来た」

「マジで!？ え、あんなに仲良かったのに」

「仲は今もいいよ?」

仲は今も良好、だから引きずるように諦めきれないかのように「ウちゃんを門の前で待ってる。」

今までと同じように、私の態度が少し違うのを怪しまれないように、今もそうしてる。

でも、やっぱりコウちゃんと話しているのが楽しいのもあるんだよ? でも、でも……

「まー、ユイは好きだったのに」

「す、好きなんかじゃ!」

「ほほお、わざわざ朝お出迎えして。クラスは遠いのに走って幼馴染君のクラスに行くユーイさんが好きじゃないと?」

「……それは言い訳できない、ユーイ」

そう、私はコウちゃんが好きだった。時折気を回してくれるところも、私の話にいつも耳を傾けてくれるところも、悲しい時も嬉しい時も一緒にいてくれることも。

でもね、告白する勇気なんかないよ。だって長過ぎたんだ、コウちゃんとは本当に長い付き合いのせいで……私はその長さで告白出来なかった。

“そこまで深い”親友”になっちゃうと、恋をしてる女の子としてなんて意識してくれないんだよ。

だから私は仲が良いまま、そのまま……我慢してるうちに、取られちゃった。一緒にいた時間は誰にも負けないのに、勇気で負けちゃった。

「まあま、ユーイこう言う時はスカツと炭酸で気晴らしたよっ。ヤケ飲み上等だよっ、はい私のあげるから」

「ありがとう……」

「……あ、マイそれは」

私はグレープソーダをちょびつと飲んだ……すると、なんだか良い気分。

そしてちよつと怒り、大きな悲しみが押し寄せてきた。

「うー……なんでよー……なんで私じゃないのよおっ!」

な、なんで私じゃなくてえ! あんな見ず知らずの女の子になよっ!

「わっ、なんかユイがおかしくなってる!？」

「……マイは知らない、言うの忘れてた。ユイはグレープソーダを飲むと酔っぱらって泣き上戸になる」

「なにその設定!？ え、もしかしてグレープソーダがワインっぽいとかそんな」

「そもそも私はずっと……うう、一緒にいたのに……ずっと過ごして来たのに……うわああああああああん」

「ユイ、どうどう」

「……落ちついて」

「うう……うううう」

「あ、そうだ！ グレープソーダダメならヨリのドクプで帳消しにすればいいんじゃない？」

「……マイっ！ それは、それだけはっ！」

「え、何ヨリ」

「うう……ぐく」

私をなんで、どうして彼女なの、なんで………あはは。

「そっか………そうだよね」

「………最悪の事態、これは」

「え、え。ヨリ、落ちついたじゃん」

「そっだね、分かった」

「………落ちつきすぎ」

「え」

「ちょっと、行ってくるね」

そうだ、彼女がいなければいい。名前も知らない彼女がいなかったことになれば、コウちゃんは私といてくれる。

簡単なことじゃない、彼女なんていなかった。いるのは幼馴染の

この私だけ。

そうだよ、そうそう。

コウちゃんの隣は私だけのものなんだから。

「ねえマイ、ユイはどうしたの?」

「……ドクプをユイは飲むと」

絶対に、許さない。

あなたの場所なんて、コウちゃんにはないんだから。

「……病む」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7002o/>

ヤンデレパートナー。

2012年1月10日02時45分発行